町長ひとりごと ㉛

斉藤 譲

人間には、四つの苦しみがあると仏教は説く。その四苦とは生老病死であり、つまり生きる苦しみ、老の苦しみ、病気の苦しみ、死の苦しみである。老病死の苦しみは、誰でも簡単に理解できるのだが、生きる苦しみとなると理解しにくい。生きていく中にはたしかに苦しみや悲しみもあるが、喜びや楽しみも多い。まして物の豊かな時代に生きる私達の世代には、生きることの苦しみなどと言い切られると、それはあまりにも悲観的な観念論であり、禅問答を聞くような気がして多少抵抗が残る。

こんな疑問をもっていたところ、ある雑誌に四苦の苦は苦しみというのではなく、「ままならぬもの」という意味に解すべきものだと、その道の大家が語っているのを見て、その疑問は氷解した。なるほど生老病死いずれをとっても、自分の意思や力だけではどうにもならないことばかりである。四苦の中でも、老の苦しみは重い。今まで遠い存在であった病気や死、それに生活の負担というままならぬ厄が急に近づき、かぶさってくるからである。

▼いまこの老の問題が、重大な社会問題となってきている。いわゆる急激な高齢化社会の到来である。六十五歳以上の人口を老人人口という。現在その老人人口の割合は、全国で十三・五パーセント、光町はこれをはるかに上廻る十九・四パーセントに達している。この高齢化率が、七～十四パーセントになると高齢化社会というのであるが、この基準からいえば、わが光町は高齢化の化がとれた立派な高齢社会である。

深刻なことは、日本の高齢化のテンポが、世界に例を見ない急速なスピードで進行するということである。国の予測によれば、およそ三十年後の西暦二〇二五年には、二十五パーセント台、つまり四人に一人が老人ということになるという。働く人一・五人で一人の老人の生活を支えることになるのであるから、大変な事態である。高齢社会は、少子社会ということでもある。因に言えば、光町の出生数はここ三年連続して九十人を割りこみ、八十七・八人、今年も同様の傾向にある。曾ての半分に激減しているのである。もしこのまま推移すれば、三十年後はどんな状況になるのであろうか。寒心に堪えない。私は、いま進めている工業団地、道路・文化・スポーツ施設等の社会資本の基盤整備のうえに、人口政策を展開したいと考えている。

忌中払い

▼ところで、国はこの高齢化社会に対応するため、「高齢者保健福祉十ヵ年戦略」俗にゴールドプランと呼ぶ計画を樹て、市町村はそれを具体的に実施するための計画を本年度中に策定すべく作業を急いでいる。光町でも先に老人のニーズ調査を行い、これらを参考にしながら現在検討を進めているところである。計画の基本は、老人が孤独や病気に陥ることなく、生きがいをもって健康な生活を送れる仕組みをつくることである。また、病気に患った者には、家庭介護を基本にそのための支援体制を整え、それが困難な者には受入施設を設置するという二段構えの対策を考えている。

幸い光町は、二年ほど前に発足した高齢者生きがい創生事業が、皆さんの協力で大きく育ち、成果を挙げつつある。たいへんうれしいことだ。間もなく役場の前に「老人憩いの家」の建設もはじまる。ここを拠点に来年から老人の人材派遣事業をはじめるということである。まことに頼もしい、光町の老人パワーである。

▼大雨の中のある葬式での一コマである。私の側に座っていた光和会長の林正二さんのところに藤城博さんがきて、こんな遣り取りをした。

「会長、忌中払いはどうするんだ」と下戸の藤城さんが言うと

「ふうむ、今日は雨だからな」と上戸の林さんが気のない返事をする。

「雨がなんだ、忌中払いは雨に濡れるところでやるわけではあるまい。やらなかったら皆呼びこまれっちゃうぞ。もう仲間が何人も呼びこまれちゃったというのに。」

藤城さんは真険である。そのうちに、近場の食堂で行うことに衆議は一決した模様で、側でその様子を見ていた秋葉功司さんが、

「足はどうしますか。各個前進ですね。はい了解。」

と満面に笑を浮かべた。言うに及ばず秋葉さんは立派な上戸である。なんとも頬笑ましい風景であり、その時私はこの人達には、当分お呼びがかかることはあるまいと思った。

▼あの金さん、銀さんが三百万円貰って、その中二百万円を寄付し、残りを五十万円づつ貯金したのだそうだ。そこである人が、何のために貯金したのですかと尋ねると、「はい、老後のためです。」と答えたという。まさに落語である。